

池から水を全て抜き、ぬかるんだ泥をかき出して池底を日にさらす。ため池の点検や管理のために古くから行われてきた農作業「かいぼり」は近年、都市部の水辺の生態系を回復させる手段としても注目を集めている。私はそんな「現代版かいぼり」の魅力と楽しさを広める活動を15年以上続けている。

## 都会でも楽しく「かいぼり」

◇池の水抜く伝統の農作業、街なかの水辺再生に応用し普及活動◇ 片岡 友美



いるよう。水たまりに追いついた魚を捕まえる作業に、気づけば没頭している。農業人口の減少により廃れていたが、1990〜2000年代にかけてブラックバスなどの外来種を駆除する手段として、地方のため池などで見直されるようになった。

しかし、かいぼりは都市部ではなかなか浸透しなかった。私は地方のかいぼりを行っている地域に赴いて勉強し、都市部でも水辺再生の手段として実施できないか提案を続けた。すると2010年に転機が訪れた。東京都立井の頭恩賜公園（武蔵野市・三鷹市）にある井の頭池で計3回のかいぼり実施が決まったのだ。井の頭池の水源はもともと湧水で、豊かな水辺



2018年に行った3回目の井の頭池のかいぼり。翌年にはブルーギルの姿は見られなかった

環境が存在していた。しかし、1960年代ごろに湧水が枯渇し、今はポンプで井戸水を供給している。その後持ち込まれたブラックバスやブルーギルが大量に泳ぎ回るようになってしまった。

かいぼりは1回で完璧を目指そうと力まないのがコツだ。長く続けていくため、工程をシンプルにして伝える。何度か繰り返すことで確実に効果が出るのも特徴で、井の頭池でも、1度目で残ったブラックバスやブルーギルは、3度目には姿を消した。

水を抜くのは外来種駆除のためだけではない。池底の泥を日に当てるのと、眠った土種子が目覚めることもある。絶滅したと思われた水草、イノシラフラスコモが約60年ぶりに復活したのは驚いた。かいぼり後の透明な池の中を、箱眼鏡でポランテアと見た時の感動は忘れられない。

しかし、前回のかいぼりから5年目を迎えた井の頭池では、今またコカナダモという外来の水草が大量に増え始めている。

日本では、洪水や干上がりといった自然現象や、かいぼりなどの農業文化が起す水位の変化が、水辺の生物多様性を維持してきた。里山で見られるような豊かな水辺環境を都市部にも再現するためには、定期的にか

いぼりを行い、人為的に水位の変化を引き起こすことが有効なのだ。

2022年にはサントリー地域文化賞を受けた。これまでの取り組みが評価されてとてもうれしい。だが、一番の功労者は現場で汗を流すポランテアの方々だ。かいぼりを続ければ、地域の

人々は池に関心を持ち、子どもたちは美しい池の姿を原風景として覚えてくれる。池の環境が悪化してもまた元に戻そうという循環が生まれ、仕組みは根付いていくはずだ。その手伝いをこれからも続けていきたい。（かたおか・ともみ 生態工房理事長）